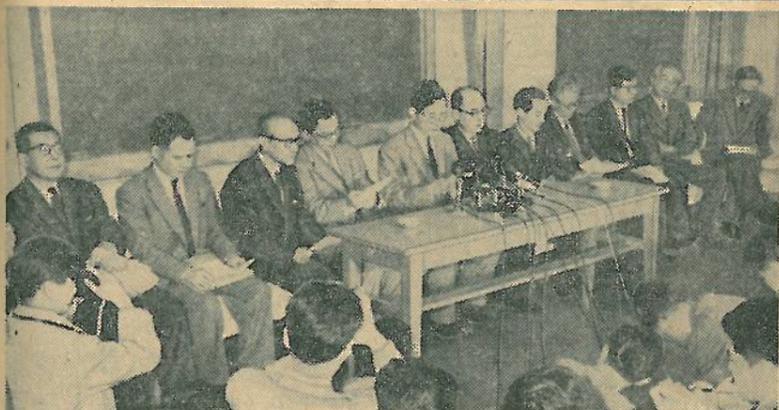


37.5.10

毎日新聞(朝)

新聞

昭和37年(1962年) 5月10日 (木曜日) 14版 (12)



京大基礎物理学研究所での声明発表—声明文を読み上げる豊田氏(左から五人目)を中心に(右へ)湯川、朝永、桑原、三宅、大仏、福島(左へ)坂田、谷川、田島、田中の各氏

# つらぬいた 日本の知性

## 科学者京都会議

「ここに声明された私たちの見解に対して、多くの活発な意見の出ることを期待いたします」一九日終わった「科学者京都会議」の縁の下で力持ち役を務めた豊田立教大教授の声がこので終わった。テレビのライトは記者会見場とされた京大基礎物理研講堂の壇上にずらりと並んだ「日本の知性」を明るく浮き彫りにし、カメラのフラッシュがきらめく。三日間にわたった会議の幕切れ。連日の真剣な討議にさすが疲れたのか、湯川博士の目などは赤く充血している。しかし参加者の顔には人類の破滅は避けなければならないのだという強い決意がうかがわれた。

# 脈打つ平和への悲願

## 自費番茶と菓子だけで

○科学者京都会議の討論は、身のはいつたものだった。七日午前十時に開会してから七、八日はいすれも夕刻五時過ぎまで意見発表、これをめぐる討議が続き、夜にはいれは声明文の検討にとりかかると、会議は非公開とされたが、これはあくまで自由な発言を保証するため、シークレットではなくプライベートなんですと関係者は語っていた。このため細かい内容までうかがうことはできないが、いろいろの問題でかなり突っ込んだ論戦が展開されたようだ。これを一本の声明にまとめあげ、苦心は大変なもので、参加者の顔にはさすがに疲れがみえていた。

○科学者京都会議を裏から支えたのは、物理学畑の若い学者の力だった。事務局長役をつとめた豊田立教大教授をはじめ、小川岩藤助教授、小沼通二東大助手、高木修二京大基礎物理研教授、

が、いろいろの問題でかなり突っ込んだ論戦が展開されたようだ。これを一本の声明にまとめあげ、苦心は大変なもので、参加者の顔にはさすがに疲れがみえていた。

ともすれば忘れられがちな平和の尊厳を訴えようとするところにある。声明の中にその気持は脈々と流れている。そして参加者は、あれも、こうした問題を真剣に考えてくれる人が一人でもふえれば、と思っているに違いない。湯川博士は最後にこう語った。「この種の会合を我々だけが独占しようなどという気持は毛頭ない。このような声が溢れ出てくればと願っています」

c092-015-024